学習院大学史料館
ミュージアム・レター
Gakushuin University
Museum of History
Museum Letter
No.47

特集号　講演会「前川國男と学習院大学」

ごあいさつ

わが国のモダニズム建築の旗手・前川國男の設計した学習院大学の校舎群が竣工してから、約60年の歳月が流れようとしています。

このミュージアム・レターでは、昨年9月18日に開かれた講演会「前川國男と学習院大学」（文学部フランス語圏文化学科主催・史料館等共催）を機縁に、前川が残した校舎群の魅力や、彼が設計の際に何を実現しようとしたのかなどについて、前川建築に造詣の深い方々に振り返っていただいたほか、前川の盟友・坂倉準三が関与した「学習院計画図」についても語っていただきました。

キャンパスの歴史ある建物の記憶を未来にどう伝えるのかということは重要な課題であると思われます。貴重な原稿をお寄せいただいた皆さまに心より御礼申し上げます。（史料館長 水野謙）

前川國男（1905−1986）とル・コルビュジエ（1887−1965）
ロンドンにて学習院大学のテーマとなる「都市のコア」を話し合う　1951年
写真提供：前川建築設計事務所

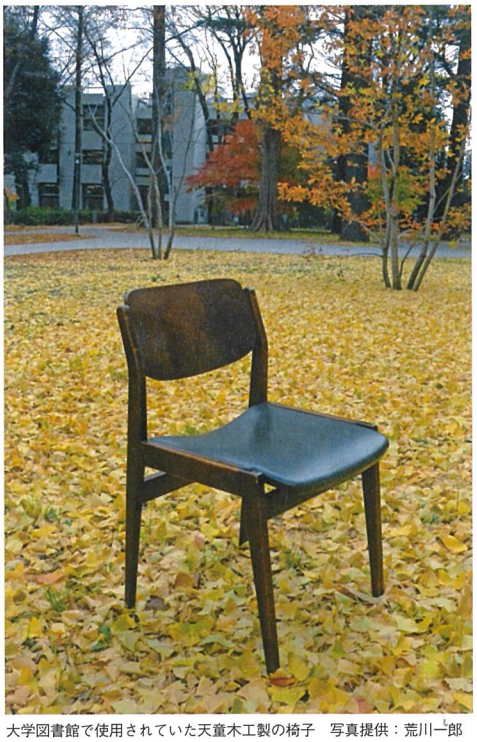
キャンパスの中の前川國男

学習院大学長　荒川　一郎

私が学習院に着任した1984年頃、初めて構内に入った人が一番驚かされるのはピラミッド校舎であったと思います。私もそうでした。モニュメントとして面白い建物だが、敷地効率が悪いなーなどと思っていました。その内、この建物は空を塞いでいないことに気がつきました。周囲の広場がより広く感じられ、その点では空間効率の良い建物なのだと感心した覚えがあります。ピラミッド校舎をはじめとして、旧本部棟、大学図書館、北1号館、南2号館、南5号館が前川國男さんの作品であることを意識したのはいつの頃か覚えておりませんが、自然と馴染みのあるものになって今に至っています。理学部の教員として最も出入りしたのは南2号館です。あちらこちらに不思議な造形があります。どのような必然性があってこのような形をしているのだろうか、と身も蓋もないことを考えてしまうのですが、見ていて、あるいはそばにいて、違和感もなくなんとなく快くなります。

前川さんの建築から少し離れますが、大学図書館では、前川國男設計事務所にいらした水之江忠臣さんがデザインされた天童木工製の椅子が使われていました。10年ほど前に、古くなったので捨てるというので、十脚ほどを引き取って今でも私の研究室にあります。先日、小金井の江戸東京たてもの園の前川國男邸を見学してきました。そこにも同じ椅子が保存・展示されていました。素人目ですが、その椅子にはなんとなく前川さんの建物と共通する曲線や構成があるような気がします。

旧本部棟は1991年に、ピラミッド校舎は2008年に解体されました。残る4棟は、当分の間、改修を加えながら使い続けられることでしょう。大学キャンパスには、前川建築と前川以前・以後の建物が混在して、さながら学校建築の100年に渡る年表を見ているようです。単に私の目が慣れてしまっているせいかもしれませんが、前川さんの建物はその歴史の半ばを画する物として、過度の主張をすることもなく、環境の中に好ましく収まっていると感じています。



大学図書館で使用されていた天童木工製の椅子　写真提供：荒川一郎